

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

盆踊り

平成28年8月第3週放送

盆踊りの発祥については諸説しよせつあります。古代日本の宗教儀式から来ているという説、念仏ねんぶつ踊りが先祖供養と結びついたという説などがありますが、いずれにしても、亡き人々の供養という意味合いは共通しているようです。

ここで、一人のポルトガル人を紹介したいと思います。

その人の名は、ヴェンセスラウ・モラエス。

彼は、明治三十一年、外交官として神戸に着任し、その後再びポルトガルへ帰ることなく、昭和四年に徳島でその生涯を終えました。

江戸時代の風情ふぜいの残る時期に来日し、日本の文化や人々にひかれ、日清・日露にっしん にちろの戦争を経て社会が大きく変貌へんぼうしていく中においても、日本を愛し続けました。文筆家としても高名をさせ、母国ポルトガルに日本を紹介する多くの著書をのこしています。

モラエスは、日本で最愛の人と出会います。福本ヨネという女性で、モラエスは「およねさん」と呼び、深く愛しました。モラエス四十六歳、ヨネ二十五歳の時に、二人は結婚します。

神戸のポルトガル領事館での二人の生活は、幸福に満ちたものでした。しかし、十二年間の結婚生活は、心臓の弱かったヨネの死によって終止符が打たれました。

深い悲しみを抱えながら、モラエスは、神戸からヨネの故郷である徳島に移り住みます。ヨネの姪のコハルの世話を受けながら、自然豊かで伝統的な文化の残る徳島の町を神戸以上に愛します。しかし、ほどなくコハルも、結核によって二十三歳の若さで、この世を去ります。

六十歳を過ぎたモラエスの心は、最愛の人たちとの別離に、深く傷つきます。

そんな彼の耳に、徳島の盆踊りの音色ねいろが聞こえてきます。

モラエスは、ポルトガルの友人へ送った手紙の中でこのように記しています。

「何という踊りなのだろう。……この日本で亡き人を迎え、供養するこんな踊りが繰り広げられるなんて……日本人は日常的に死者をまつり、死者と語り、盆には亡き人を迎えて一緒に過ごす。これがどれほど人々の心なくさを慰め、死の恐怖やわを和らげていることだろうか……。」

徳島の盆踊りの音色は、モラエスの心いとに、愛しい「およねさん」や「コハル」の

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

面影を深くよみがえらせたにちがいありません。そして、彼はその踊りのリズムに身を任せたことでしょう。

踊りのリズムは、生きている喜びにつながります。その喜びを、人々は亡き人に手向けるのだと思います。

「・・・安心してください。私はこんなに元気ですよ・・・」と。

モラエスは、それから十回以上の夏を徳島で迎え、七十五歳で徳島の土となります。その翌年からの盆踊りでは、徳島の人々によって、彼に手向ける踊りが、なされたにちがいありません。

盆踊りには、生きている喜びを感じ、それを亡き人に手向ける供養の心があるのだと思います。

— 終 —